松嶋日記　雑記雑々記

へ10
4482

早稲田大學圖書

呂
門
號 1142
巻

特
へ 10
4482

呂
門
號 1142
巻

特 へ 10
4482

京都大學圖書

きさい乃宮ハ一條院ノ皇后定子ヲ云也関白道隆公ノ女也元ハ中宮後皇后ト称ス清少納言此皇后ニ仕ヘ奉レリ

きさい乃宮にはおもひかけすおりかくれさせ給ひてさるを
のうときゝはさらにわすれもしつるふみを世にまさり
ゆくをさかりしまのこのさりはちらちなりあはれとき
とおもふ乃あま侍従のつかひらいやころさんそ
そまぬるみやこのうちをとのはかりまする家れ大よりも
くちをしたねりしんよりは心をよ老さぬべき身をなほ
かくれぬるちとせの松のすくせおほ
けなれとみたらいかうもいふかぎりはおもひやるに

ひさ人のおとゞは左大臣道長公之

ほいなく、家のならひとこそなれまさりけれ侍らぬ所にぞおはしける
うれくらしろめうしや、木のまろどのおはしまし
かれさび、旅よりなのりおぼつかなのむ、そこはかと
おもひたちはべる物のうさに、いへば、ゆかしからぬを
よそにぞんじおとゞのうへもん所に住けるに、なにかはしらず
うちはべりしてすまゐのかげろふかよひしとも
をかおりけんなどかとおぼしはべらんとさいつごろ
ものゝふのとがめもあらぬにふる、清水のあたりも今は

下野守名ハアキタゞト云下ニ見エタリユカリナルトハ左ノ如シ

清原氏
深養父 従五位下雑色
顕忠 下野守
元輔
女子 此女陸奥国都嶋ニ住シ尼也清少納言ガ叔母也
清少納言

おそろしうは下野のかみなる人は我ゆかり
なるよしをほのめかしはべりて、ほこりひきて、はてはのあしろ
としてみちのおくにくだりけるに、さいはひなきにしも
しられかくはまでと思ひつゝ、あてのめは
伊勢路ちかきかひの甲斐なき野をゆきてふるさとも
あふみのまつりとか、夜ひとよ、花山のいつくしきまで
れうのゆく雲路なり、立出てあそのとゆう風も
なぐさめもうちぬる、物の真黄なる草根も枯いとど菩提

いのちなれ、旅ごろも、おもきに、のこし服も、ゆくところく
のあむの雲も、たゞよひきけど、しらくもて、きりいそぐ
旅まうちなりしびやどのあるじ、あまたのすぎやうざ
つうれしや、ともとなる人ともす、やつむやさゞめごと
足、日もたかくさしのぼりて、のさきをきそひ来て、
みのかさをとるらうりやうじぬなとて、いづちも志らぬゆ
き人のかしらにかりてつれしてはまへひつ旅くは、
そこらあたりのあないなど志るたちへすやをかしきも

くつけらるぞ、旅立で日かずもかさなるかはげ
ふいつの日を東に見て、伊勢乃海づらをまはりつ、
うれまひ人のうたのまひぞすみのうち
あすもいでて松かげにはなるみのとりみや
すぎにしをそれよりむまや伝ひとなるに
ゆきゆきて三河の国となのるのせすん、こて
まづふるくろめのきくに八橋乃蜘蛛手もくちはてゝ、
青柳のかれえだたえて、このはおちてだるゝらゝみ

うかびておもしろきに、なにはづくるまも、もみぢいそかし

「その折に、錦きれ川にちりうかぶ、
かれえの柳、わかもみぢもなし、
行きれ中山こえてうちつゞけ、山かさなりて、
いづくかみなかしもの風ぞてふわかれし、するが
の国の宇津の山に海あれば、我になれし
まろねぞ、さらとりしく、みのかさもくちに
よはに、かたへの岩にこしかけりまて、風を

らひぬ

「宇津の山うつゝ夢とそわかれし世り、
終にみるまや、いつとさらぬ
きよみかせきをもゆるたびのあるおもそ
ところつけなるそのあとのゆうみよとをめぐりて
かへる女まや、都にえさ得ぬ其果よるなきしぬ
とそて、みやこの人とけふはかさじてまれそよる
も便りもちうしぬ、まうぞとそなたにまらむ

冬ハうちと云ヨリ以下中之巻歟

イニコレヨリ中ノ巻トス

ふつかたちいでて、またはくゑんなれば、あしがられ

みね雲松風は、老らくのはぎのおよぶべき方

しもあらじとし、浮嶋が原までは、みちゆく

人またもたすけられてゆくくらしもなき旅じよか

んをぬすことよ、かの雪みのざりて草鞋

づきも童しきふ笘屋やの里ふ、ひぢりのおと

すいまして居ゆるよ、今年しは此処にて年を

おくりぬ、これらちまいいかでかさて花じ堂の

松ニシキミヲ立添 十二月晦日霊祭 枕草子云 出づりそれいとどしふきやらふ 中略 おべての月ごろ 家ゝも足ゑあちの志をすれつこもり おーも時のまて あき人のくれわ みれ志くゐやと わりなけるよ又よ いひのぶるぞかへ め乃具ふも志て つひあるいゐるふら

房よごもりて、たきゞつきなむとする方便も

なくて たゞゆきはふりぬも むなしけよあ

ひは年くれの日なりとて 樒さき

そなへて 霊祭るうばそく優婆夷の

許にあつまりて 房にきたりはべるは

よろの嶽、海いかめしくなりて、浜風たけ

しく吹よせけるまさご、雪残るゆふた

たちこぼるゝ、まさなの雪もうちぬ、ともし

あかしとや、松ふきあてて、あつめ海を
かのうぞくの蘇むくつけきひげはふき
つくものゝほしぬ、さよもねずすゞきふ
もとれ里斗し、ころのおきて、おのはおち
れかるゝ見るからちにいくかあまりなんそ
の里、乱床よなりぬべしむじま蘇さう
におどろかさ。して急佛して あかしきり
イ あすのつとめも思ふをぞ
まちの庵ども ゆきかふもすたれくさじきり

とのこと も見えず、高くゆるだしぬりこめ
まりとりくしてこがらしの時をすぎ三座
よしのの宿をとりていとも花もさかゆ
鳥声はなさものをみるおきてないはと
はるをもところのどかなりやまいろ中北
つかの枝まどろむこゝろもゆくだちなる
よ海さしくもころのらいかいかしちき
ものうく、東瑠璃のくにゝむまれよとの

ふるさとへあるよし地にして、さめぬるまゝ
に、あるじれむ志ばよいと海路わりて、みち
のおくのたびに、出でさまよひぬ、ところのうへ
をくらち、わが紀太郎の男、二郎の、おそろしげ
かぞまへて、十かしらもあるむくつけき
ぬゐをねのおきどもわかしなだりて家代
夏て、箱根とこをさへぎるといひ志るしいとつら
がうていざなはれてまよひ路にまよはす心

さもなかなかやうにしてそのあるほど
に、つらさぢどころなきれどひとの山と
たどりけるまで、あきぬるは十日斗さすら
ぬてこそむさしのをもとへ古郷わたるを
いかりいてなづらきよもゆきなふ人にた
づねつつ、白河の関をこえ、世にいはさる
といへど関をの見とが見て、なまなかしき
やゆきあかしんまとふ城、わかれそろしき

いさとりふさゝ字スミテヨムベシカ葉ニ縦ノ字又不知ノ二字ヲモ用ヒタリ愚案ニハ曾ノ字ナいさト用ベシ

わらゆくほどちかくなりて、つひには
おほせに、関守こゝろある人にて、これ
ひらけてあそびぬ

名をきくもいさゝか川のなかれ、
いふまゝに、このわたりなるところ、
こゝろに念しつゝ、かづらきにたつ年
めぐりめしてみちのおくのみやぎのこほり
の国府のやかたは下つけのくにのみこともち

あきらけノ文字顕忠也前ニ注ス如シ

ちあきらけむなめのすむところにて、たづね
てゆくに、思ひ出けに、そこをまかりいでて、松島
とか、しほがまてもさくらにかゝりあそぶ浦
まで、すむとききていたりならすしるものは
のなかれにこのわたり僧房ふところのかたへ乃
家つくりたまへりてくらしけり、

康和七十三代
堀河院年号
貞丈按康和
より長和
あるやられ
いうたらふ
此松嶋日記ハ
皇后宮定子ハ
堂殿道長公か
ひの氣しも
し後ニ書たる

下

あらしもくれ（暮）にてまゝ、年はゆくゑ残りけれバ、
この（此）とく（徳）だい（ダイ）とこのきしども、何がし（某）れ僧（僧）都君
上へ（上）は、みやこ（都）のおとゞ（大臣）なる人の子なる、
し唐（長ナルベシ）和尚と年（年）号乃まろ、爰（此處）にこそありけ
と言へり、かの（彼）あそ（朝臣）のあそんの尾たつまゝ
ねまゝ、みやこ（都）と語らひて、つき（就・イ従）て、ゆく（行）のひすまゝ（澄）
し（行會）ゆきあひて、なくなく（泣）と相逢（相々逢）あへるしをり（栞）

新しもんゐんの后宮ハ六十六代一条院乃后宮長保二年十一月十三日后に産ありて後十六日よりくれありけ年二十五御堂殿ハ六十八代後一条院乃代万寿四年十二月一日かくれありけ年六十一又七十代後冷泉院乃御代永承六年ニ陸奥國ニて安倍頼時軍を起しけるを源頼義ら討まとよしいへと合戦ねんつゞけれよりおつらき

してかうふりいふ尼くうつりかへなりたまふとも
かし、佛の御名をとなへつゝ、うき世をのがれし月送
らん。また后すら、世をさりて侍りしぞ、
かしこくもちぎりてすまゐ侍りき。此あまぜんじ清と
めされ年月、まかりぬ。御後をしたふこと六とせ
ひかりのみかど、かくれさきだちて、なげしみ、遂に
さる程に佛事をいとなみ、いとひのかたをと
とくなりぬるものしれ、侍る事の我さはいへと、

陸奥國ハ大よ乱まつらしありき清水納言ヵとらえてへりし法堂殿乃ことらひし年より以後安倍ヵ軍よりも前の間り下りしるへし康和よりハ七十三代堀河院乃代乃年号也康和五年ハ后宮乃かくれありし年より八十四年の後之御堂殿乃かくれありし年より七十七年後之然れハ康和とあるハ後人傍写乃誤まて

苦しみつみて、我とつみをもおとせまほしく遠
れ、いきとまる風さ身おし侍らぬ、大納言
のとりも、御許此局乃さきだち、まもるゆかりあ
なまし我きりて、みまかり給ひて、

玉葉集ニ入

思ひやるあはれ風までぬれく雲局よ
よせてしまふあはれのつりみゆ、
さうしておくりまで、物かたりてつとめ、おのれ
よはいかなるも、ひたすら菩提の回向

実ハ六十七代三条院五代乃年号長和ある乃ハ長和ハ五年迄なり 長和ある乃ハ時代たかハず

いきうし
古今集離別部ニ山崎より神なびのもりまで送りに人々まかりて帰りがてらに別をおしみけるよめる　源実
人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていざかへりなん

はこ急たえ(絶)ずしてあんなると聞ハけふ(今日)まていざ
まてむ之川いきうしといひてとゞいざま(退)
うりけんとも、たまゆしなばまでは忌い
しうぎむうしなよの人かゝれ(縁)僧の世
にでゝ志(室)つまも身ともまかせざし、あだ(徒)なり
さち抱く浪荒ハうきみちふめり(和布刈)
てまさむあま(海人)乃若めともよ布かりすして
志(基)ゆきゞなり、

「しぬまでゝ志たひのふかき(深)ことはくとも、
あまたゝびみ経よみならべを、
この世しるべ行よきごゝろもおこし(起)まさ
おやもとのかみにほ事ても都乃うつのれ(音)
とゞまりし御まゐりなりゆかまいとし(最)く
きさい(后)の宮れ御おもうけ御堂(殿)との
のちのへのを思も、ゆめよりいいくう
うはせりきん、佛の御志あはれは、

きさいの宮ハ前ニ注ス
御堂殿ハ関白道長公

いふさへ哀なりけんや

仁治ハ八十六代四條院ノ年号

道朝親王ハ百代後圓融院皇子百一代後小松院ノ皇弟也上乗院宮也

右三巻之日記号松島日記蓋
圖者土佐守光俊蒙
仁治皇帝之勅制之今借道朝
親王之御本寫之畢

此松嶋日記は清少納言か書る所なり
かの少納言は一條院の皇后定子の御まへ
有ける人なりきまことに枕草子を見る
老て尼になりしかは古事談にも見えたれ
とも後おほつかなかりしに此日記を見れは後
下野なるあはたゝ女なる尼のさそひしまより
都を出てみちのおくにくたり都をはなれて尼
まつしまをみてかく書に書付たり此日記の末
に老松を結へよみけるにつきぬ海見えたる
ましいみつしい都を立えしりえすしして枕こ

有りて終りにはなりしまゝのしるかり
しるしはたなやうなれとかうかゝるに御中の詞
なと枕草子の書さまなるも引うつし土佐日記に書
るさま海はいと心あるをみしけなるかなし
見ゆめり土佐日記世にもて除人まれなりを
まく藤原政光かおさめしをとこひうつし
てたゝこの拙きにかくしつ

天明四年甲辰二月十五日　伊勢平蔵貞丈書

加朱書了
三本挍合之本以挍之取捨而爲定本

雑記

○志ゝは志ともかせ給ともいへり志ゝの世とえ見えた日本
紀にみえたる事にて其にてしるとのことなりもとは八代
そりたる蛸なるとひやうりて広と書りつり日本
紀第十四によみてよるを

○いれこるをはいなつまひとりいふいなつまの其名充分
萬葉にはいはつまとのことなり

○かけろふはいはまに大和物しりのそいはまは其名かふるく
いのけろふのいのりゆるとのことなり

○いろつら文をなするをいふしりなれとなするとこのことよ
めくはいうはちらかおとろしはるて給めりあなかなり

○あめふるしがふるゝゆのこゑなり

○なぞらへしこれハ万葉にハことなる川とよめる事なし

○つるさハおほしよめり和名に鶴の下に鶴の字

をいだしてさハ川とかけれど歌にハ沢にかけり

○さハけものの中にらし入日の影をうつしいもせんの

かれどもずかれじ事なり

○川なぎやさらつとよめる歌ハ堀川院初度百首れ

中によめるがあまたよめるかし

○にハりとハ鳥をもかけとよめりかけハかけろとも

○まさらるにしるし

○さそはしらとよめり

○衣をときぬとも もとも よめり

○衣手をいでたちまさけふらおもひし

○草とハかさとらしも見えたり

○志れ草とおもひし草ともいもハ見えたり

妻をおもひしむら草とをもふしいらんとのむらさきを

萩まとろひくおもとをかしや のひとしらる草とおもひしれ

草とおもひける

○とこ 又ハゆかといふ

○万葉集十六にならへをとこ 月ハ別名といふ

○萬世ハ日本紀の名にも 旅寝ハ次をかしく蟋れ

来ぬれど鐘をも萬世にかなとほり

○月とよむことおもハしまゐれど歌にまゐることに付語れ

六百番歌合に顕昭おもひまゐることに餘る歳浮れ花とに

まれなるとぞ俊成ハ判して是と難しなう

○みちたる海を、らかうなよむを、萊の字の意とかくいひ
なして義を失へり

○志ぬれは花を、れしぬきれど、意ゆのことなり

○菊なまし、かもしらよとぞとよめる事なし

○ひこぼしを萬葉集に月人をとこと讀り

○氷を　ひとよむ、同し事なり

○古海は小島なれど、只ち海とおもひて讀り

○弁の宮の絲とむすとを、ひこともいふ、萬絲をひことな
るとを日本紀にひとところ有て語れり

○こけを　ひかけとらへどて、これいくなるわし次

○ひらけとおもほしも、いへり、萬葉に見えたり

○やどりあと、ほやどりし、わ花なきんなり、萬葉にはほかと

よめり

○おれと、いさこ、あれと、まれと、時はれしまれ花はをと
し大きれなる通し、萬葉には、おもしろきことに讀り後の字
小なれこすやとれまれよめり

○志を繕ひしとりし人、萬葉と日本紀とに見えてあらしとよめり　枕
花のうしたるうし志たるし、作けれど、皆け字を

○いたいはおれし、花の字いしらへ　いたともよめどかなう
まあまく人の知ぬなし

○大日霊女貴とは時日を包るとかめで日とも包りと、おもひしよしこと、
救とよまれどもなるいもしの如し　とよめりよひとは皆おもしき萬葉
古きなり　初稚　とよめひと

○虫の字、むしともうじともよめとうじはきられくなく

貞丈按
西行家集に
何事のおはしますとはしらねともかたしけなさに涙こほるゝ

といひて哥よみけるとか

○あつかし、やさし、かたしけなし、此三つの詞しんしやくして詠むへし

○かたしけなしと読すへからす

○またく、またに、またなし、けしき等と乗りてねとも

○かしこし、おそろし、同しんなり

○いと海と、知海と同しきこと、但知海ハちさと海と云に同

○こほりの知海といふことはこほりの海とよむへからす

○いへたてしなり

○葉紫に

家門内元のことをみても百千鳥ちとりとまれと見ハきこまね
[illegible]のおと百千鳥とよみ年中行事に
[illegible]とい[illegible]後恵法師の林葉集に

梅の花ちりしをたつねて竹のかしらに枝をつかせる

拾遺愚草に建久六年正月叙位にかいしるす翔年

たまつ督陸奥に

呉竹のこつよりやなれ枝わたりぬ
百千鳥こつたふ竹のよの独もともに[illegible]
[illegible]八万葉にわけいる本借とかて
こほうしとよみ
[illegible]富つ

○おしねハおそい祝とかへると為伊切しなれをつかてこえ
あつきれハ奥へゆきて具足なへを[illegible]
よとあるも

○ふみとを海つさとりハ具足し万葉にある使と玉梓を
そうたまつさとりとハへきことを[illegible]ハ略せる
なり、あつされハ万葉中十三あたりと[illegible]ハ矢とも[illegible]奥なれ
[illegible]思ひんと文して[illegible]なと万葉をとかえて玉
梓とかいて[illegible]叶んよ同し又万葉集に玉梓の妹と
よめるハ今のんをかへしに

○なきはハ古事記に渡根とかけり、みきはにかよへし

○わきて、ことにといふに一物あるなし
○あらしと、あらしとおもはれし、万葉集に下風とかきてあらしよ
○おろしとはよめり
○あらひとて、万葉集には、あからひくとよめり、其先をなすへし
○つきくさと、又ハつゆ草とも、万葉にもまたよめり
○わかなかにと、訓つちとよみ、齊明紀には訓つちのと讀なりけり
○時鳥と、ほとゝぎす、其名をなすへし
○山鳥をとものといふさねとよめり、古事記にかんなり
○いなをほせ鳥をよみて、ひとつ鳥といふなり、日本紀の
○履中天皇の巻にみえたり
○へことに神代紀にまた見えたり
○ほつきと神代紀にかくたちとよみ、山かつらのとよりへもの
○あしかれが国のかしらのしくてなきより名を得るなりし
○おろもくびとかへりといふ、絃語の考あるし
○やまとごとハ、緒のむつあれハ、むつのをといふ、六絃琴かりあこの
むかしのとものよりあとにて云ハあれハひきさゆるより神やもはれる
○萬葉集にびたれほうし
○よ月の絃にあらんとも、みつの探ありけるを知人なかし
○琵琶をよ月の絃といひしかるに地寄はなしあらく見えたりひとほう
○しらへにも
○ちとハ、いとみ、あれしなし
○いさりびとおもひつく、あかしのくし
○あかとハ、無名つきかハ、かれ中の別なり、云ハ
○かつきとよあたりを、なりて、かつきするかと万葉集に

よめり
○神のやしろをも又いはむろといへり
○みもろハ只社に古語なりといふより只社をもよめり
○うつりさをいうつりさとも只かはれるなり
○よ絲こそ
○住らへとしすひとをいふ人の家にすむとをいふなるへし
○老翁と日本紀にをぢとよめるおほきなるに同し
○をぢをばハ小父小母なりけれど老たる人をいふなるへし
又小父とかくハ何れや欽明紀に秦大津父といへるにハ父を
ちゝとのこゝろなり
○とのゝよきたつきもまたのなし此外ハ同し物なり
○わかせことおもへとおもひしなるへし
○おしなへてといふハ俊成卿の住吉社歌合に判して書
るにハあつかれ人の言葉のよろしくなるも歌合の詞に
法師と髪長といへるやうにおしなへてといふハゆるしてられたりとれ
いひならはせるにやあるへしかしこみおほえぬるにや
○なしありのみ
○三輪の山をもむろ山とよめり此外に又もむろ山有
○類聚國史に大堰山とあるハ今の嵐山なりや
○かみ山をも又ハ神山とよめる歌万葉によめる神山ハ大和に
てかみ山にもあまた有次又いつくにも神のましませる山をいふ
おほくハ神山のかくれたるハ神といへるなり家集に若狭に
よみてあまたの中にあり
○さけとこゝろといふハ本居翁の神の来ませるとのことみえたり云

とあへるをはれどぞ和名抄に海とかきて、こまといへり

○かけうたいふことのよしは、六帖歌にことをかけてかつことゝか
いふればなかとものやうなれど、われならずとりなおたるとのも
あまたなむあるべし

○万葉集には舟のをると梶とよみて、今梶といふ物をたゞひとつ

○八十梶ヤスカヂ　二梶フタカヂ　梶とよまれたるは、今とゞむる皆櫓なり

○棹の字かいとよめるもさとよめるもあり

○藺ヰと読むべき字を、つひにあやまりて、又名に百葉に智恵と
よみたるも見えたるはしらしと略しておくや

○かたまと日本紀にかつまといへりともあれし

○たひらかにしゐらにもそらにとなむ、されど皆同じ、和名抄
にあるを出しおく日本後紀に登勤トロ野とあるを、京の泥濘

野とかくの後なるにて濁りといひたるやしこ筆なり
うきまは同しく、又万葉集の字とかきてよめる
あつまの道のおくにもいとおほくよみたるなり
こひ同じ

○きさひかりとよませたるもありけり

○そらにいひと日本紀にたもちいへり

○水とわかれひとりのむかしまた同じくもとなれつ
うきとりへ足し、景行紀にも冷えどものこともいふ
催馬楽にもことしもあきなふ赤塚といふ集にありけり
からに海なるといへるゝこれ同じ

○頬ツラ　和名抄に帳ホコタチ トツカラ　是を後の方とかきて、ほうそとい
わつら今はそうよりは、ほうあまらさるや

のごときは、和名あれ、のたぐひとあれば彼方すぢなり
ほとゝこと日頭の字なれど、かなりしくほこゑちといふなり
戸のつまを、ちまりのなれば、ほこすちといふなり
○こほりも、こほるなるべし
○しろ、あかく、せなか、はら、
○さうひ、ぬゝ、
○催馬楽にかきかしといふなり、世まうしかけて語らし
○頭、かしら、○鵠、くゞひ、こふ
○乳母、ちおも、めのと、○父、ちゝ、かぞ
○母、はゝ、いろは、○兄、あに、せのきみ、せうと、○弟、
○おとうと、いろと、
○おれいちやこのく、○姪、めい、をひ

○ならひとかしなし、ほうしむし、
○神のやしろ、と、おもむろに、いつ
○うと(ウノトン)なまけ、○ゐことはしといぬかひ星
○ちゞむ、いまれたら、わ名まれ出されば
○弟と、いさとも、かや、とももまかり
○面とさされとよなり
○鹿と、無風新集にいはれ、ほぎしと読り
○指、および、ゆび、○葉、あつまる、つとへ、どかる
○枕、ちく、そうしき、らかへ、○こかと、ちゝぶ
○ほほきみ、ちからど、○おゝこれや、きりれ、きし
○号とし、ゐ、わかうし、ゐかみは、こり
○ちまうし、ちこのえ、○ゐえ、ひよし、○かはと、た

わたつみとよめり。ふし子よ りうき子よ。田舎んとよ

石海　あすじ。きさかた、林のうや、。出こととかへとよみ

○楼、ひらじ、。浜、藻、かのうとも

○粉花、いちしろし、いやちこなるも

○うと、たちばし、又あつさ、

○大沢の池、広沢の池などいへ、中に大沢は、昔の名也

○更科山、まさかどなきて山とよし

○巻向山と、はつせの山とよし

○いひと、かれいひとよし

○結と、ゆふとよむ、あられは大きなる結なといへとちいさき結をば

ついゐる文字のさま、延喜式古語拾遺にあり

○あちを、まじれはなるさまに、かりそめなるをいふとなりとよ

いやまあし液

○うれ名と、めさしと、おれしも、童子の名也、万葉集にも

放髪丱とうれしきとかける也、猿衣にいとあさし

なる御子らしきのけらはかきあられるとあれなば見よ

髪のうしろをまきて結ひたると見えしもなり

清、みそ、しれて、○みちのく紀とくちのりとりし、

盐、りい、まり、

やまとうた、撫やまとハ此国の惣名也、

山城川、日本紀、淀川也、○山城女、日本紀、

やまと琴、やまと物、やまと歌、やまと女、

以上三萬葉

河内女、万葉 大和ことば、古今 やまと人、伊勢物語

あつまぢ、あつまのこと、あつまのとこ、あつまのとこれ、

あつまや、あつまあそび、吾妻さね、

伊勢人、桓武朝人名、又堀川院の後度百首詠之、尾張粗、若明衡新猿楽記、甲斐哥、

土佐日記、相模路、さがみの旅、以上二並万葉

武蔵鐙、伊勢物語六帖 むさしのの、六帖、近江路、万葉

近江のみ、古今 信濃堂、小大君家集 信濃路、万葉 しなのなる、万葉

ひたち人、万葉 陸奥山、万葉小田郡にかねの出る山を家持おしてかくよめり つくしぢ、万

みちのく紙、万葉 三吉野、丹波 たには路、万葉 但馬京、六帖

石見がた、拾遺 もろこし舟、た もろこしのまり、吉備人、古事記

紀路、万葉 紀人、日 淡路島、伊予簾、朝花集恵慶家にまかりて清少納言にいひおくりける

土佐路、万葉 筑紫路、筑紫舟、並二万葉 筑紫櫛、拾遺

宇治人、万葉 網代人、上同 あさみの氷の高すべし、

奈良椿、おほ人、以上万葉 なら坂、日 ならのみやこに、

ならやま、ならのをかの、なら川せ風、以上四万葉 荒神山松、万

泊瀬川せ、万葉 佐保女、万葉 佐保風、万 宇治河浪、万

あすか人、足田根、古今 佐保姫、拾遺 衾路、万葉

難波人、万 難波潟、万 難波女、万 以上三 難波菅笠、万

三河発 万葉 吾ら妻 万 明日香風 万 須太人 万
娘をとめ 古事記 さゝら人 尾張連 佐良のきよ人 万 人々 催馬楽
遠江宿祢郷 企救 同 三鴻木綿 神楽歌 たこ旅路 万
郷人之
おしか羅小舟 万 入間路 万 海上潟 万 か川し
うらせ 万 木曽路 万葉 いさは風 万 かもとよめ 万
かもりハ陸奥にさいりふ不あるよし
又かもりなど織ともあるよし
三室路 万 志賀さゝれ波 万 津守網引 万 あとも山つら 万
稲日妻 万 伊加保春 万
松浦舟 万 松浦佐用姫 万
木綿山雪 万 水茎ぶり 古今 四極山ぶり 古今
白浜波 万 あと川柳 万

○一本菊　紫の菊を一本菊といふは武蔵野のゆかりなり
萬葉以下家集に故内侍のかとのまへのひかしの対前に
菊花賀えらまれ せさせ給ひけるに
むらさきの一もと菊は代々をへて 武蔵野みなと 移ろひにけれ
此歌は中宮をたのもしかりきこえけり
新拾遺集廿五 附の寛平の御時菊合に武蔵野の菊と
よめる
名にしおへ花さく宿のむらさきの一もと菊におくれたる君
此歌も紫花菊といふけしきなり
拾遺集十七 物名に ひともと菊
あたらしき人のきてみる菊もまた花あるやとに色をそめけれ
此歌新和撰集にいへるを以てつるなり
続後撰集十八 雑 因融院にひともと菊を奉るとて
尚侍藤原灌子
時雨にも雲ゐの花のをりにそへて
御返し 因融院御製
いましへとふらむ後のしるしにも紫の菊をそへてまとはれ
萬葉集 神武天皇御歌年 紫の菊の賀
承平三年時雨に一もとの菊をえこのみける
新撰家集

ひとつの葉にはあらずして言の葉になりてこそ世に流れ
新勅撰には葉の名はなくして葉の一つの中に色々を
うつしたる違ひあるや

○春の夜とよめる歌はあまたあれど後撰に

△ねられぬをしひて我ぬる春の夜の夢をうつゝになすよしもがな

△梅の花匂ふ春べはくらぶ山やみにこゆれどしるくぞありける

新古今
△春の夜の夢のうき橋とだえして

続千載
△又
かはらじとちぎりしことの春の夜の夢のたゞちは見えもせで

貫之集
ねられぬを強ひてわが寝る春の夜の夢をうつゝに見えもせで

伊勢集
春の夜の夢にあひつと見えつるは思ひ絶えにし人を待つかな

新古今
春の夜の夢のうき橋とだえして峰に別るゝ横雲の空　定家

万葉集
思ひつゝ寝ればかもとな春の夜の夢
むすびけるかな

六帖廿五
春の夜の夢を現にたのみつゝ人を見るべきものならなくに

西行法師山家集にも
年くれぬ春くべしとは思ひ寝にまさしく見えてかなふ初夢

○五月は初めのなきも五月雨
語 伊勢家集・中務家集・小大君集等に見えたり
海人とよみたるは天女と海人女
○あま衣とよみたるは天衣と雨衣と海士衣と
なり 海士衣ならば天衣なり
あまころもまたみの衣とつゞけたるは雨衣なり

六帖廿三 海の衣

去向のしらに玉藻かり侍る海士衣袖さへ濡れて
ろ時やさよ

○あま雲にふすあまへ春雲とて海雲とて、あま雲のよそにも
かけ侍けるあるハ天雲とて
後撰 雨雲のはるゝ折なく嘆くものから
後拾遺 あま雲のかゝる折ふし材なにゝそ経むしぬれ
袖にかけ

○宮木ともいへり 宮木引 いつきの杣 杣かくのこと
にあるハ高つくる材木也
大内の造作の宮を造るとして杣材 宮木
志かし
此宮木もあつまれ宮の庭の木ゝを宮木ともいふ
おなし殿中を宮木とやはこそよりつく

○藤衣とふそのあり服衣の名ともいやしき者の着る
藤衣あさくぬ織たる布也

○たちせあすかのゝ 大の羽風なとふるのあ萩の風なと
まあるなり

○志の松は三そあり、うらなると志とふ とかくれとして思慮と
いふハ意をも年をと惚思しかれ人おもいとあへ昔は忠
なとは志とあへ不思慮ないふ頼も思の字と情とせる
寒の字ゝとて隠寒もかくの紐の思慮とふかきも異ならし

○花深ふかさ侍る、花の色も深し毋のかつをあるれ
桜色ふともしとて花深のうつりやすきあるは花菜
の色あて深き事とい

○花桜にふかみ侍て、桜も分といふへきとおもしるは百
と又紅桜をいふ日と桜の中に一種の花なるを紅花桜
桜あこふあるもとく六帖の桜あつけしく花桜の誤とも

又新撰つくはなどの集にもよめり
○ちかきころ榛と萩とかの榛の木はかうと信り
されの木とかくいはれたるを郷にて人はかのはのかへまとて文
字と略されし山の岸川にてまれあるかは都にて物すちと
法ともなし物と何かとかんの本深ようし人日本紀日本後紀
あるは蓁摺衣といへる名も神楽に奇りまさいなりにてなは
あらんとよめり今ともさる人の衣にて深かるは古歌に山
里にと於月をも万葉中十七首本とて此榛とよめり
歌のは萩とまうさ萩は花すりとあるゝいかく人にとて
衍も
古里まと小野のさいはら榛とそ又々萩の吉野の榛原とあるは
萩とぞあらぬとなりより萩とのことなりへて統く家
葉集とものにも見えず見し

続明集より
音羽山にもより出る水や都遠つれらくも
流れけらむ
音羽の山といへるより出れど音羽川といひつたへ又
小野山の上と音羽山といひて山より出る水と音羽
の瀧をも言へるなり ○順家集にも萩の奇に
さと原の其榛の下萩と秀こえりもあかもとかなよう
此露さいもおけさとよあると出のみまれるをとかよう
歌のことよあるゝ歌の志けさとこまやかにいく此字を
詩にも用ひて奇しく比はに見へる歌けし
とりはけみ字はことけと音通へば此流の字とさいひなを
るなり
神代紀に栲縄 タクナハ とあるでいふこと栲衾 タクブスマ
栲角 タクツノ 栲拷 タクハタ なども見えたるは古語に白きと
ことそいへる又栲は木の名まことは木なれとおほ
命とつけられ神やなれし布のと古くは何にあまと
つけけるたくさんと古く栽あり又万葉二後の字も
あすのたくなはとのことよめり古今集中小野篁朝臣の
隠岐國よながされてよめる哥
わたのはらやそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつりぶね

此縄くさとは海人のかづきする時に縄をとりてあがらんとする時
其縄を引ゆゑ也按るにいさゞたぐりあぐるとりなはとも
なづくとりなはとは日本紀にも万葉にも有

△岩ねふみ人は小精ともやくとあるもたけくし足ぼそせかまし
くのをとこ　是は日本紀にあり

△素戔も何と見えてあけまし何と山師上と云いふ也
作り玉や

又大海あるみすわたし八百たきわたらし　いめこと
しるしも

又なげきのれ石祢は妹が髪ばかりに乱れつらん

又さすれつかれ国に雲まきたれしきの駒はさわがしわはそと
もいし

此ほまあり此詞たしかならず今は人頭の中にあれ
と同して如何なる岩のくいはんとて頭のたとへは是也
船し此海くとり詞をそへてたとへとするよし
かれしからねど是も又あくまで縄に乱れよといふ也

○雲れたちてみたり居るもの雲雀かと蜘蛛かとよみ
　蓬家万葉集
天路来るくものとしある乱れちりてもいとうか楽

△
あしたの蜘のゐかくらくもへん
ゆふべの蜘のたちゐは風と今日は知りぬ
とあり

○露霜とは露と霜とは露と霜との
事二つなり万葉集七同廿十に詠露霜に歌よ露霜
とうろふ霜木の露霜さもとおもひてある秋の末に露
もく霜のこぼるゝ霜となる頃の名なり是とてもこと
わきいはれし

○かげろふは三つあり野にたつと蜻蛉と今一つはかげろふ
命のはかなきなどを詠るやく蜉蝣とやおなじはかなき
ことそれあるもひとも是をいふ万葉にかげろふ
ものべにつけるなり蜻蛉にとまれるもしくはかげ
ろふといふ花のちられくはかなきをひともしの別名也

など思ひたゞよふらめし けるかや

○玉かつら（ニツアリ）玉鬘と二ッあり、玉葛となり、玉鬘は安康紀に

押木玉鬘などありて玉をかざれるなり、又ほめことばにも

いへり、葛などはつゞるにほめてもいへり、玉桂は月の名にて

かんなるこゝろをもよみつゞけたれど、ほめ字をかへるかいまる也

○さねかつらにも二ッあり

新古今に

△さねかつらいとゞ流れてところのつらいの変りてかけて
なれやん　是も葉の白き種を葉とかけていへり

後撰に

△足引の山にしげれるさねかつら語りたえせぬ
ほとりなれ

六帖に

△神代のいかにちはやふる　さねかつらこのかつら
うけくまなくれ

是また白葛といふなるべし

○志のぶ草にも三ッあり、一ッには垣衣、是のなしにいへり

忘草と又志のぶ草といふは、大和物語にみえたり

是なり、先達多くあやまりて垣衣と志のぶ草と

同じものとなれり、又垣衣の和名はのきの

新よりはじめておなじく語れば草とせるをひとつとも見え

たれど、業平のよめるうたには、軒の草とよめり

忘草又伊勢物語のうたに、一草二名とはなり、業平

の志のぶといひし是なり、忘るゝと女の語に是とも見えて

草とはやりて志のぶ草と申し思ひしのぶ

の草の名をかへたり、下の心に志のぶ草とせしが、忘草と

かきわけてといへり、三ッには百葉にも萱と志のぶ草

ときはなる志のゝ小笹もしもあらばかはらぬ葉のいろのさかりいと

貫之集ニ

ことの葉はいかなる色にかはるらむ志れぬ草葉に秋とのことはりなく

元輔家集ニ

紅葉のちりかゝるやとて露のうへはおもひそめけむ

新古今

白雲の立田の山の八重桜いつれを花とわきて折けむ　道命法師

白雲のたなひく山の八重桜いつれを花と行て折まし　京極前関白家肥後

廿二首山に八重桜なとあるゆへ雲のまかふや

志らる

○若葉とは初葉をいふなりしかし若葉とて深くそ見る

まさきのかつら紅葉初葉深くまかへ紅葉と緑にてもかはりける

初はあらはるゝ色のさかりにはあらねは花にかはる深葉とはいふなるへし

葉は根より芽を出して初より後にいたるまてをいふ

あらはなりや

○今はたゝし木枯の風さむく吹しきて

枯木の葉をふきちらす也

古哥

△木からしの音さへ秋にちりはてゝ梢のまゝに吹せ

ときはなる杜の風さへふきかへしつゝおもひなし

又云嵐

△木からしの後の紅葉に風吹ねやにてもとゝまれ

△家に在れはとゝめかたくもいまさらにかくはらふ吹わたる木枯の風

好忠集ニも

△木からしの秋より初葉の色そめていかなりけん

うらかれ初枝にかゝる吹風にこもりしもかりけり実

秋ものとかならは秋のまてとはかりなりかかけれて

此を古今和歌六帖にも橘正通とあるをひく

漢ちかの常によみ来つることは部におきても此集の始にある
とあるを二首と唱ふる判者の右方始の方二首を
記しつけたる正通ハここのもじとは秋風といひしけるの
風といふもあらはれあかしとて秋の夕つ風とよそへてあれと
歌しけれども柯貢にさしあるさはりの風をよそへて
いへりけるとぞいへるはすこしは大形ハ
今の歌くあれ事といはりけるなり

○ちごこ葉ハ文種実録にハ毋子葉とかけり和名抄にハ蓬蘽
とよめれども此葉とよめれどもれあるなれで蘭鞠葉と
とも有けるところとしもやまひの三月にハ是をとらし
小加一つきしてよくまれたり葉の色蘭に似て花の
うすむらさきのあしく葉ればあるく見えたり

六帖廿五にとの部に　人麿
秋の山のしけりたるをよむしかも知らし級
とかあるべし

是を級みて川を持ちれど漢年蓮河に是級とも
きこえいつものにまゆんとおもへし今の歌と

萩の葉のそよぐにつけておもひしる又紋の事に
小紋をとりけるや　つゝじ玉拝の志ほりも志らぬ事なるふ
まさた
是も解きてや共にかゝるなりいふらし解きてあかする
行きさる秋の共にとりかへすり
後撰集　中紀秋上　たゞこれ秋の萩はすでにあれ事なると
人々よみ侍りける　新古今
まさきなる萩のなるあさし枝にやうて歌あなるも
こらあれ
秋萩のしげくよみ侍りける　中納言女王
人志れぬあとや思ひみ秋萩の花ぬるをまて歌をこそ
萩
此歌ありけるに似たるといへる又かの
がの木なる萩も萬川の葉木あるなれハ夜のねぶるく 合歓(カフカ)
わしこきをのかる秋はしに萩をとりて中を見よ
葉ありけるをまさといへるなり
中務家集に
日暮れたるつゝめる萩の梓庭の此歌にて
せぬ　ひきこもりつゝかくれさきみもちかつ
是ハ日暮れハまつねるとよめるんなれどもこれハうき

貞丈云
合歓木ヲ子ブリノ木ト云此木ノ葉夕暮ニハ葉スボムナリコレヲ子ブルト云ナリ萩ノ葉モ夕暮ニハスボムモノ也ソレヲ子ブルト云ヘ人ノ目フタグヲ子ブルト云テ子ブルガ如シ

ふるきのねさすまゝとあれど又宵ふとれハぬすといふもよし
おゝりといへるなりしさふるも葉のまくにまぎれて見えぬをいふなるべし
萬葉第十七に
伊勢の海のあまの嶋津かあはひ玉とりて後もか恋の志けむ
六帖に海士の鮑にけふとのせたるハ鮑玉とあるや
むかしへ萬葉に鰒玉とよめるがおほけれハ
或点にハ皆鮑玉とかきたるハ誤也山家集にハ伊勢の
むかしよめる前のりきとおほすも伊勢の海のあわびに
ちひさきかたしかき圓子をとるあまのもとにや
やかましとかくある人語り伝へしこゝのまゝや鯖
似たる魚を鯖ともいふ或ハ字のまゝや讀日紀に
よりて名の名も故同しきさまのわかちや
わかちもしのむかしをもくにおもわれしと
明恵上人の言にあかしの海の言なり

山寺に法師なくていさぎよく仏をこゝろ
ざすハかたちの名ともいふなる
○菓ハよろこびのあまの中に菓をとるかいしこころれハ受
食菓とも名付るなり
○魚ハうをとあり魔あれハ鮮魔とよめり

○鳥ハ人のさそくかしもくしもとれど捕え
○漆 塗律 ○鷲 元 ○鯉 点 ○鵰 熊鷹紀 物の大きなるを熊といへ
○鷹鳥 同 たゝくわる故にや ○鮒 ふハ字の音なハ奥也
○鯰 ら何とよめるハ字の音なとハ奥の略なり
○寺 丹青色と見えくさかしくみえたるを故に名付る也又俗の説に
らふ桃く真言塗とて本そしそもかし
○佛 ハ勃駄を旧譯にハ浮屠とよむ是人をあらはれば本半とらへて名付る
儀と見るたらわたる日本紀にも
○神 かくの略なり 明神と日本紀にわくのことと点しまさるあるや
○社 やしろ 屋代也 ○祢宜 日本紀に祈のことと祢ぐとまたるハねぎ我身人の上と祈ぐ祢ぎる者なれバ
○巫 かんなぎ 神 和らぎ神をなごむる故の名也
○大刀 たち 断なりといふ義と切故の名也 ○刀 かたなの略 片刃なれバ片刃といふ
○長刀 なぎなた 鉞のごとくにて遠くへとなぐりたる故なれバ薙鉞とよみ中比より出来たる名なり
○薙 かうふり 頭圓にてかうぶると略なる 頭椎劔とこの頭の劔と云
とりて名付られたるハ私に白頭蚯蚓とかいみを背字

○笠 かさ。雨をしのぎ暑をふせぐものなり。俗に椀の中にかさなる水流みゆるを、かさ… ありとも云ふ…

○檐 のき。屋のはしのきをいふ。のきはのきばともいふ。

○親 おや。老たる子のおや。　○子 小こ。　○祖父 おほぢ　実父之父。　○祖母 おほば　大母也。

○父 ちち。父と母とをふた親といふ。父子…

○曽祖父 ひいおほぢ。ひいは一重重なる心なり。ひい日の… 今一重隔つるおほぢといふなり。

○母 はは。母とは…母と注せり。…荘子と名つけ…説き…なり。万葉にはいろはとよめり。

○曽孫 ひこ。今一重へだてたる孫　○甥 をひ。兄弟の子をいふ。

○伯父 をぢ　小父。　○伯母 をば　小母。をば、をぢは父母の兄弟姉妹なり。

○従父兄弟 いとこ。古今集に「いとこなる男」とよめり。いとこは…兄弟の子なり。こと…日本紀に…と見えたり。…これもいとこといふ。

○蝟 かひ　蜂 めい

○獣 けだもの。毛生ひて四の肢あるものは皆獣なり。肢 …

○木 き。け

○草 くさ。雑草 くさぐさの…

○竹 たけ。万葉集に…

○亀 かめ。神異ある者…

○松 まつ。万葉…

○杉 すぎ。杉木…

○花 はな。…

頷　ひたひ　ぬか

額ハひたひ[illegible]平らかなれど略していふか　ぬかハ白[illegible]
ぬかとも同額にて[illegible]板歯と和名にぬかのとよめるもむかし
つらむかしおゝし歯ふりハひろければ板のやうにつらかなる
たゞいはゆる[illegible]也し

鯛　たい

平元[illegible]魚の名なれど云たいらかなるは魚の平の[illegible]物の平
つらぐとたゞかんのこしらへて見え延喜式に平魚と出たり

馬　うま

義の為[illegible]日本紀にむまとあり[illegible]いふて[illegible]
へし[illegible]馬ハ世の財なる故に[illegible]国と唱へると見えたり

牛　うし

日本紀に大人とも郷ともいへり[illegible]牛ハ中央土
畜にて田と[illegible]車をもひき用[illegible]
[illegible]しと同額にて居たり

猫　ねこま　貀貓　ツラネコ

呼ネコマチ　鼠子待の略を鼠の[illegible]つねとしてあれ猫とのこふりて
略語の中に[illegible]也し猫の性ハ鼠をとる[illegible]
[illegible]
[illegible]

畑　はた

是ハ[illegible]作る俗字にて久田ともいへるとりハ和名に妻[illegible]
[illegible]火田二字を偏旁にかきて畑とかけり和名職幡
[illegible]山中の農民の山[illegible]山の中
[illegible]
[illegible]畑[illegible]草木の[illegible]不毛の
[illegible]

雛　ひな

[illegible]
神代紀に雛[illegible]山[illegible]

[illegible]
續日本紀に興福寺の僧徒の仁明天皇の御年[illegible]
[illegible]
橋建[illegible]蘇葛[illegible]葛天之
古事記[illegible]
日本紀には[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]葛野[illegible]
[illegible]今の
[illegible]葛川[illegible]葛野[illegible]

ひさごこの名のもとのこころつけるよ、ひさごこそもひさ
かくしもいへるなるべけれや、萬葉には久堅
ともかけるは天先成て地後定まるなど久しき
なる心に陽に対して久しく堅き
さらでも天は長く久しくて堅しといへる
ねばたゞ火を鎮むるものにて今此瓠葛とひさかたとは
是正字なるべし、萬葉には皆借字にかけるを此瓠葛は
いふべし、神代紀に天吉葛（アマノヨサツラ）とあるも延喜式の鎮火
祭祝詞に伊弉冊尊黄泉より返りて生ます四種の物と
生ます中に瓠あり、是は水を盛る四種は皆火を鎮むる
具なるなり、ひさごもあるものにて瓠のつる
長く、葉の茂ければなり、又天は陽なり水は陰の

あまりて為ることは火の鎮となれば水を集る故
に瓠なるを加へたまへるにや、伊弉冊のみことの守りとなるべく
ほしみおもほしめしぬるにも天吉葛と名をも神の
しめたまひて瓠葛の天よりふるを瓠葛とひさごこそ
詞にはひさごは瓠形にて天のかたちにまろなる瓠の
歌にも似たればいふなり
あまねし京にと行くるまでに崇神紀上に和珥野
よりいはひへを土（ツチ）あらと掘りて鎮へとし
用ひける故にかくときこえたるを此説は古事記に
崇神天皇のよせたまへる事あるなり

○ 掻 かく　掻挙 うきあぐる　加つれば かくとも ○ 捧 ささぐ　捧挙

○ 擡 モタグ　持あぐ　持挙　○ 助 たすく　○ 輔 たすく

○水守　みもり　[illegible]田[illegible]今農民水當と名[illegible]

○蛭　ひる　蛭ひるむ虫なれば[illegible]の蜥蜴（戸鋤[illegible]

○雛　ひな　（ひなは[illegible]

○卵　かいこ　（貝子[illegible]云は貝[illegible]

旅　（旅[illegible]

○鴛鴦　をし　（[illegible]

鴛鴦ノ注ニテカクベシ

○惰遠之　[illegible]萬葉[illegible]月[illegible]

○幡　[illegible]

○鷗　かもめ　[illegible]日本紀[illegible]鴨[illegible]

新撰萬葉の[illegible]

[illegible]

いさ[illegible]山[illegible]

赤染衛門家集に[illegible]

同家集[illegible]人の[illegible]

[illegible]

○蜻蛉日記[illegible]

[illegible]

元禄十二己卯年五月仲旬

契沖述作

雑々記

一 おそれ人わとうる男と見るほどにおひましく大がね
男く城国を一日にていて行り

一 大するむさしの年端る色なきをもえ開しやうけする
長器にある戸

一 西の洞院条より小皇嘉門まてハ海人もすまぬうきの
中らしとしたる一町とりかまえあり

一 上総主西宮まよい神

一 獺獺城

一 今いもうし云よそれ元輔ふるは父にありてかけまう
の使しけるに一条大路をわたりけるほとに殿上人の

車はしかくして物見の家の前わたるに
おいしかへりたまひて今よりは上下ゆる
いふかたありけれは馬よりおりね
一 かりつはさらすの中ののちつくるなるは
一 ことものつら　あくと記せす数
一 王城のみかさついつとも
比叡山にむつる
一 かかりけれは大なる鼻なる　妻板の中に年比の打戸水　高雄
童のころさましもむかしとなくすん口手あるの役　あにはかり三尺ばかりの絵こと
絵晴く
一 こ海つかのをしるしあふく
一 なる海文くれ

奥丈桜 うれいシキ ノ暑時

一 うんじてはつらきを
一 かうつらきよ
一 奥誉出（イ出）七大寺額一あしやの玉乃たからをもちける
一 くたられそく
一 うすせ紀女はむ羽
一 みちのくにはちかくつきしくなりける白鳴感　イロナテ 日本記
一 うへ見えのいとふかくさけるか
一 いろいろとちかきさく
一 わかあうり戸
一 入るの君をこそ
一 日々はらふく
一 見はかなる入るなり

一 錦のゆくやさ　十市皇女

宇治拾遺一

一 聖賢に逢て愚とこそいふなれ縁と志きりに
かたちつすこれと世の人見るにかれをとりなし

一 今ハむかし大舎人番利とて縁度の事にいろふみ
りける僧ありけり名をわ泉式部にかよひけり路とかく
ようなり

一 こよひハ御わ水ハいりて

一 かくらおつかさる法師

一 故仲胤僧都とて説法なるしける紀人ハいましかれ

一 雨風ちりしきりて御事に及ハて

一 むかしとんのみのこくはをとしりて

一 むかしあるところ鬼横座におはしけり
かくしきこせ竹をといひよしとれ鬼の前を
祈りいてくるめり

一 あさとこ鳥す

一 思ことうれしき海

一 きちりもちりえいすゑといふしく

一 そきものよもわされゆかり

一 うらみられあつかれたれ人の精を思ひけん

一 不動袈裟

一 くハうれんと御覧なる

一 むかしまれしとしくいつかる仏中へ

早稲田大学図書

一 たゞまぎれ
一 まぎらかして
一 あやしやさんざめり
一 うくハこれが中ゝのことよ全ハあるまじ
一 後水尾院通後後指遊と思ハれ候時崇薫久於
御をとのつくりの字なるやいかゞ思ひくらうひける
に後水尾院にいてあまく損なかりしかいろ字かあらう淑と
いろれけるをなくしくしきいはる後二条院か絶と
絶えく頓阿宗高ふまかりうしゆしに花の本
也いハむかしまもかいうしれ修しかつかまつりてハ
しゝこともう
さいそうしに蒼々かいうれ咲けりかり花ぞ 也ハ思ハこゝろ也

とくそ仕へゆしくといひかれハ通後ゆきのしくよきと
たりまむしけむ。けるがりかいう車ハにさしも
なきこともつかぶれをさるるまて花とそといふ家かな
めのくらえかきの花りし後へ定とくいひはれめり也
さりかれとてちんとも殿まて侍まるかや所り
この度ハ大かたのことかわりの方も志うゆかぬまさとかくは
人の撰集をもけまかれ勅ありてねむるとあさましき
すれりれ
　□□大納言歌よ
考さてその人にもいひ候山里をこととて宿の松枝
しつかれとよそ行ひつゝハいつくことまことも世の人
くらぬのうらやめ敷れをの斉にこゝまで見いれるよあう
まことやるの何かまへかれとのかあるハ花ともくとハ
いまいはい

たれかなりしきみなるいふなれは宰大納言のいゐて
よく萬久かえわたりつきよかる人の撰集にけ
たまたまくみえしいさましく語ましきよりよしみて
出かりさるめしい道後のもと新古萬久よそみえて
もとせぬとかまりけれは諸わ井とらつきさらく
ぬかいひそえいられける
一 さとかいそれらて思しみ
一 かたつゝ
一 むこのほ大
一 さらあけそよしみ紀けるまへ
一 むそあもめれふくつかきなり
一 まうしくれと
一 あられ分称をまねしく如
一 さけの二尺
一 たくらくらの井をしけてねられ
一 津國まうせんる
一 そのうちた大食たてとりいよらふ物とかしいてしいれ
もして大倉のむろし来らく行仕したる格勤の
りのまものくいなる
一 ふれさり釈るとの深紀はあらく完のわうりぬれい
うら流れいすゝえれとのこい歟りあうとえも
一 あさこしくく實と山もゐぬ
一 あきせんしやう
一 き抗

一大きん不のむ祢へとまりまりて やまと紀しうハ
一ふしま紀つきね
一さとうしま郎等
一これハよやことなりかりと わさと あしくらり
一五尺程を於りまし
一しかきねきねの銭とらふとのさく帯して わる
やりまきとそけかさ也とも
一このふと見るハこせんまるがり味噌汁に
一けとちめのはしくとも あはしくらう
又これハ大わときわかと漬子をよいまくとらす
一ところへまちなん 参銘ましし
一西京よりさいと出はし杉はする不あり什聖とらしく

梅いとほしりかれハ名をもちて折々食和よ
仁聖ハ徳之
聖ハ清濁なり
一白米十石とむめのよしいでくと松さう
一惣之銭まる 蕃あり
一これさとまちけさ皆からん人もあね○兎なりくし
一よせいしと於りまさて
一せわかれ家乃祢り記と入銭水をし出りしてきせみ分
やしまさくとあるりとゑなるゑと
一鯛のわるまゆとあけくそまつ売りな銭に入女
まもてまかつそ於行けり みてまさにしかく
一よ見まくちうはに袖とつくろいはまさかい
のこひかとしてやりの紀を中せん

一まれにしけつり

一ふるしきれ

一此所にて紀をとゝをしと松はさいといしふ思ひ

一うたあそく

一よの悪しくをしくつむ恵つた命れこしらく
おらく

しさるかし

一さそらのうす世りんゆゑく原京とあさきほめ紅ひら

一むかし池の尾に禅珠内供といひし僧ありき

言葉くもうくなりしいを年久しく行くさうてかりけり

一さる此内供を起れ出りけるに太子すたりれりけれ

たれみにゆうかさうたて見て給ふ茶ハあらむしき紀れて

大根子のかつき持ゆりおつみたちてかうれうり

一ゆくとくらかしきく

一うちとハしきうく院ちどのか見る思

一家のかねや川なさ人の味をおもしろときれ侍しも

一しらきとおす

一志保らして外出よき時うすい武部ふそれかはれ

一つひちの人川をなちのあるきうり之ふうりて海見を

外殿とその住所のあのゑうれけしきもりて

一侍もおもしろくいしいりれそ

一うるせさ中川をうしうゑせさいかもすらん

一大飯よ女の見えしてひを紀あらうく人こちをやとゞめ

くるまとぶらく此侍るあきらしめきやけしらいあら

しとひいろ皆きかりう

穐季通　　駿河前司強力

一 童部なれともかしこくも風そきことのハ

一 然るを人は大将軍

一 せいもつてやとまゐりけり

一 さんくらうまんりのやすといひおきし

一 大系は天神

　延喜御時

一 大らするくちひるの羽とれる風

一 めつらしもあらなれ門かゝるさくれまてちるよう浪

一 ませうけぬ縁六のあさけなるふ

一 たきりゆくとれもてふかく風雪まあかえくふ門ええ
いしくす

一 蚤かしあやまりく[illegible]やととりけり

一 酒色かしく

一 えちちんのくふうくしきれまくり
けなしき房

一 ちれ川もしく

一 むけうのやすうれ

一 たのむ身おしことてちやしてまうくしせきせ
行ひいる（イニ四座）

一 うしろしのきうる人（イニて）まれもしまさん

一 えさしひきひらうふきア

一 このくらうかれいとたつ（しの字アルカ）となけりけりや

一 良秀かよちりし不動

一虎はしゝて皮をとゞむる梅
一よくとゝのふる所をまもる是
一人ハよく家業かせぐへしと見えたり
一おしきハ宝なりけれ世の中ふようをとゞめよ
それいかゞせん
一今ハむかしのさかりにかはりて名をもとむる人のたからの
うき人を見てはむかしの義理のまもりにて人のまことに終
おしみなきのえんをせんの事ハ伯母をはしめとして
人のいふよきれおやの教養を伊勢のこゝろをもひめきくこと
あきらめ人ハしき物のこゝろハ能きたゝ御ためにハ
ちかき人ハまつりの教よく目とし風の吹行けるよ
よくなけれハつくしまの人の部の御ためなき

う風とちりたることの人をとめよせはやとしりもとめられい
われぞ我のおもひの人ぞたゞしくいふなくいまけハ大ひ
めにせんの名ハこゝろのそこをかたりぬれぞなりかたき
らいつきにゝてきて不思ををせよとこゝろをおもひかけすえ
せしといひかれぞさしれそのみのよさと志をいひかれぞ
それハ我もちゝんと志をにかりきていふしくかさ
らいかの百両をちゝましてこの御恩と思ひまさと
よくせめのいかれぞさす人へ幾まやねのりんぬをまそかう
やすめのこゝろくしくひたちへいさほよくよりあ
ねよふなきかれしめとかなもすおかとへくめのと嘉つれ
うりねさましくんのしと松の人くゞりかしいつさことな
まことときくしら嘉つれてこそうつらちの母ひさかへかく

いひやり給ふ
　にほひきや都の花はあつまちにこちのかへしの風
につけしハ　返し　あね
　吹かへすこちのかへしハ身にしミき都の花の
しるへとおもふにと　年月へたゝりて伯の母常陸のかみの
めにてくたりけるにあねハうせにけり
このいせのたいふの子孫ハめてたきさいはひ人おほくい
てきたるに大姫君のかくゐなか人になりける
あはれに心うくこそ
一今ハむかし伯の母仏供養しけり永縁僧正をしや
うしてさま〳〵の物ともをたてまつる中に紫のうす
やうにつゝミたる物ありあけてミれハ
くちにけるなからの橋の橋柱法のためにわたしつるかな
なからのはしのきれなりけり
一今ハむかしとうろくといふうたよミ下種(ケス)乃
家に人もなかりけるをりをうかゝひて入にけりなへに
あるものをとりくひけるほとに
　むかしよりあミたほとけのちかひにてにゆるものをすくふとそしる
一寺せさしめ
一伏見修理大夫ハ宇治殿乃御子にておはすあまり
公達おほくおはしけれハやうをかへて橘俊遠といふ
人の子になし申て蔵人になして十五にて尾張守
になし給ひてけりそれにをはりにくたりて國おこなひけ
るにその比熱田神いちはやくおはしましておのつから

かさるもぬりにすれあれとも此無礼といふ事のこと
やくにたちところ小對せさをならしかしかれと大名司
乃武蔵国司も治さりくにのとのをおちおちられ
きりけり

一いにしへ大名司なりしんはしんにあまりなる治まりくは見来ま

一しかまいらぬと

一いやされしいく志らんやうも点せよとなさらん大名司
にしきまいらぬ御沙汰をおかしまいらせぬやうに御礼
といふことは事を對させれいしまいらす大名司とかく

一せさせぬ御らんせるはよろしくとゝまれとまろうたる

一若はぬつまの仰ちすや此ておきてわらかは
まるぬすりその事見ゆ候あるらんぬ治学理を終らふく

一前は猶事せんとせしは百條部いようたてまつる

一き世ののちさるとかりてこの條は段條しあひ
しふなんちむつかしさの條と通らんくき

一抄さらは此條おくしんとならしてさも此世の中よか

一申さこの若くと心んちてうまれさていは國司となく

一なれいちかうおうちんにその大名れ條くと條縁といひし
小地の國司條縁といふもしと變す事ありけり

一庭は雀のしありさけると

一今はむかしも一前司といふ家人の女

一京辻よりは小室町よりこえありし京辻なりてまた六七
名ゝほとは小家もなくてその縁なくつたへ高くほて

一其は

一おひとりと入せたりあたらあらんとよことしてこれは
小菜のいうり名家なり
一せとのしるる菜ありたりつ家とらんとく
一あらまんけく
一あり様菜まこそげけつりくちせんとまれは落れ
くすまし
一魚や
一そのねるれちらとは
一あさけとたかうしあうしんとをちうさんをつまりてを
しらすらねれとよいし一つ
一うつしんもうせちて
一うらとさうれもこありうとのしりけきらん也うに記也

まてあそうめそうにかきうなし
一ぎいじんとよしりくその人のひすましのハことしてい
うんたいとりそうまうらんよ
一いよくはまいし也いふれと
一今いむりし一條攝政とは東三条殿の兄よれたるは
やんとれをさし人の記めさうとのりとへおさうまでお
ふろうかれと母なりをおもひて父よは志らをさせ給は
ぬはなまてつけをいうしちうろうし母とせなあつま
ちしきとしとらいうてのうましいおうさるときの
うひてましきよ文うさそうてとらきく乃
まいやうりふれと
一地蔵よそとこうここの家の前ようくいうしうなれた

人志れぬ身のいとけなき年ごろよりたえず逸の實

とゞめけるを見てわすれがたしとは志るしつるのみたと

かりしく

一 かやうのところにはくはしからずわかちたるものなり

一 さるめやこえたまふ一族とぞきこえしを君のとりわけたまふに

一 佐渡守なにがしの子の毛をあらはしたる事ははかりしらぬ人な

いとあはれなるこゝろなり

一 袖をつらぬる心をたのむことをさしつかはすゆゑなとゝもせ

らる

一 十一二ばかりのわらはのもとへ行しと

一 二人の子と舟の中よりあらはれし世にもありける

一 なれつきよきをし吹出しける

一 此世のうきは勝ちて

一 わが師随身の申しける

武正府生秋を待つべきこの人なりとて心にかけ

やうなしといひあはせつゝふるき世のあまたを

にていりし見りにたまはるとおもひしをしりて

一 賀茂のことに本のほかのまつり幸ひにあひたまへる

一 智證法印有識のよしに

一 大豆といふもの酢をそへてあまたをとりてまゐる

ひとりひとりめしたまへるを酢をそへてつかはす

すむつかしくにがくてあぢはひなきこと志るしたまへり

まことにさまざまなりといふ

一 ふ海へゆく東ありけり

一うつしおくらるゝかきて　一やきあけれは

一山範久阿闍梨のいとくらうすくこのかしんにくふく方
まゐらんとうち月十かゝんはらんをんさしとをはきん
臨終正念うしこのにほとさんれいしけり
山の楞厳院に住けり記して極楽を称して行住
坐臥西方をうしろにせすつねに大小便西にむかはす
入日をせなかにおはす次西坂より山へのほるときは身を
そはむけてありき

一うれ層りきてくへとしはかれいたしもあつうとも身うしく
かゝおらんけるよしかん白を忌日なとおこなうかるか
しゝ末まてゆけは成ゝおくそね日あとかきゝしてある日ハこ
次通うしはしかきらるれハいうまとえおりへてゐさしをゆう

めうし念してゐたは
一ゑみかうき色にむまれしへときこゆぬ
一扇と笏まゐらせてうつくしうねたり
一御前にふかくをさせ松らしかしこて秋中あまつき大つ
おほあしせなとしはし
一かひとつらるれけり
一其口同書にあれたる
一きやしくと笑て
一こしれおとまちらくひとりしへ給ふれ所におさきへしぬ
一こそくとのおゝかね
一こそろとわうらく
一御幣紙うちまい紀茶ほとの物

一あやめ草ゑて

一うんのあさうり。

一それとゆてんとて

一国の后菱十兄へ崇らし人やう大きするかせとゝあり

所の笑え五色にして角志ろし

一松の枝ふしかゝりてかうしてふきうんけの侍りと

よれ年に竹の七年しまゐ〇ゝ御きさろ女とぬきてうちゝ

とか代らるゝとんてあひはすると云ひしらんとてかゝり

うらわ兄りまてふ大きふ九くと出して闕つあまた原女

人うれほころひ思ひ参らさせかころもめくへける

一面といふえたるまえ兄つけ侍しておのとまそりへき

まうけまくものしこ兄ち敵らうとも申しまして行くらの

年さろまゝしいゝめき〇になてわ女ろさうかとらへき

ことろ。

一播广ち前家行あきれさる

一出す称はりぬくさゝり女よ

一今はむかし三条中納言とらゝ人ありけり三条右大

臣れ御子なりけり才ちうしこくてものこしれ車地世の事

うれ志り紙つうちろちへりこうこのうちゝ於うゝかうさち

うちかん枝たしなる笙のふえきゝあてふ於うさうひなる

吴うゝ大きまうりてうんあかしなるやうの於まう

せうてうしきせて肥させしいけ色て

一何ちうまたきゝ松ちにる敵のねまゝ大きゝれるれま

りなとうゝけしゝいあゝねかとさうへし

一 干瓜
あしわ色のおせらふころらかまるか志まりしらたり
おりしし花どりりりたまし
一 鈴音をとこちや人へおまとおんかれ
一 もしもへとり人梅まち一もちち梅しまてり
一 大椙子をとられのとうかちらんとへてこういとうぶしき
こちのちに紙まつとえろ只しせまり 陸國紙之
一 よまもいをしして
一 御ちとこ一寸りや
一 布こらもりへ 三疋之
一 月をあまえ只りとうもふ松こて
一 元ものをぬるか風立まえと千母哭を忘なとハりふすやある

一 みんとるをかとれ
一 あさねとりまゐらせおそれ
一 をれくらる人もぞ衛教
一 やりうられをとうりてそや
一 風の吹つくるやしふ徳つきて
一 又西宮殿の大饗に小野宮殿ハ尊者にておはしけると
有けれと云々
その日あめふりてわさといなくてそくわりて承て
おきけるを小野宮殿をわきまりのそりておはしける
中殿に大きなる木有松一本ふそりかうその葉ことに
人とる人度此かるしまえとのこゝえ給はいのは
まことこの大饗の日をも月のくもるかれとも度此をはいりし

くはしくつくりて松の板にかへりかけける
此かとのはまた何しきにまたのこりて為のそはにある
すいらしくめでたうぞうしう申
一 かしこうこそ見れた
馬
一 今はむかし信濃国に法師ありけりさる田舎にて法
師になりたれどもまだ受戒もせでいかで京にのぼ
りて東大寺にて受戒せんと思ひてとかうし
てのぼりて受戒してけりと云
すゑふちいさやかなる厨子佛をたてまつりけり
毘沙門にてぞおはしける海しかわ
一 此山をまろふにゆきしと申

一 河内国のまへの庭によそ山の中に聖ありて河内
国信貴と申所にましてきんこといふ人やありけると云
一 やくたいといひかねとかへりて物は仏は柵を乗しく
あつくきに海にはつゆけふもぞうりてきたり
一 鉢はのりてきたりし蔵を取てきはいける
一 宿のあつかりとして
一 わらさうりのもとく十日ばかりありへりけれはこの人
のそらめでたにゆけるもの又の日あさへさしと
ぞと云
一 まうとやう　餐應
一 鉢の瓶しづくとありく
一 ありしやうにして又よりこめする事ありて住なれて

一 このふもとかみよりなるへきなれ
一 尋にかなふへし
一 まくのあまりけくもまする　勝るる
一 美にはひしきんてちして
一 ませいたこはをの
一 わかぬきは誤る
一 森の科の冠もかきゑするあとみうしらきに
たてゝ供養しなし人講師しきその佛かの佛
と名をつけまうりけり
一 あるきとらけれはいひへける
一 今はむかし大隅守なる人国の政をしたゝめおこなひ
給ふあひた郡司のしとけなかりけれはめしにやり

ていましめんといひて云々
しもとまうけて打へき人まうけて先に人ふたり引
はりて出きたるを見れは頭は黒髪もましらすいと
白く年老たるを見るに打せんこといとほしく覚え
けれは何事につけてかこれをゆるさんと思ふに事つ
くへきことなしあやまりともをかたはしよりとふに
たゝ老を高家にていらへをるいかにしてこれをゆるさんと
思ひておのれはいみしき盗人かな歌はよみてん
やといへははかはかしからねとよみ候ひなんと申けれは
さらはつかまつれといはれて程もなくわなゝき声にて
うち出す

年を経て頭に雪はつもれとも　しもとみるにそ身はひえける

とにかくれいらしくあらはれけりて来してもゆるしけり
人をいかほどかけんとはへし
一 美作国中さんかやや御祈なりしまへりしやとくち
此ハ仲さんハ檜尾ふくあんなちなれ
一 いかりこそふく　ちかりけりしてあり
一 ひとつゞゝ僧
一 かゝるつらとのこつゝるしろもさうしま杉原へて
一 此のあふぐくりしらなけれども
一 萬を菜とぬりふるやう小ゆひと志ろまて
一 色のせあらきうれを書経の是と其の殿上の
君はうらハつけてらいふことまつゆしゆかり
下地とのことものさを進とうくきしふひんなりけり

一 ちかれをこゝはかくせちいまゝてこぬを眠さらんや都とを
ほかくまかさめやうこさいあるを祈へて殿上の人へく
志ろをこととうくきんをまへしとよしいとあへて
けりさてつゞいあつるやうかくさいあめて今ゆうなりて
記読をとりしまき奉りしくのとゆゝとうるれ兄とよい
さう仏をのことを酒くてりのかきて取出さきてゆのうひせん
云云
一 あるきく立てけりもしろくよきことく
一 ゆゑとされ世またくし残りゝて
一 ふることをりて額をゆけ
一 何その人まて出いき顔
一 まうしけれきさらん

一 ゆりしかやとおりんく

一 ちんのあらいさしれぬあとさき山かなのさ想

一 川よさかりと入ほきの入ふれ上人法ての出茶あり

一 白きこても松ろくある比まかせつの思ほし到来く

一 法師陰陽師紙冠とさて稼ある事とうゝけく

一 うら河もみえ見ぬ所さりけり神主かりりけり

一 荒見川　山城

一 忍ふ人はこれのちの紀事し

一 あせかゝく

一 くゝねしま　法くし

極楽寺　堀川右大臣兼通公建

一 今はむかし鏡をいふしく息ききたるものかいはし

一 ことかくれひちやうさくとおほせられける風よ人くわろく

一 ようそうらみわ末こゝ堂の

めくりくるさたへしもよ桜花散ひらけちりきゝ人なほらや

一 あれおほけなうとおもひて

一 くもらしくさうて縁待

一 母の花しく形といふきへしと昔よりいひつたへたり

ちそうつるわかるかゝる白雲（雪）の井のくもの堂ほうのあり

一 おいらくこそわすらるゝさこそく

一 ちこの昔をかくなと思ひしりいや

一 今はむかしあつまそのゝいうしくさいのとゝならはる

あくとさく

おれてありや法の声や鹿の火のつきて二人出るみる　蒼宗上音

ゆつま人のやうによもんとく実とつゝ世さへよきとうける
とぞ
一 やのとしは　南ノ夫のとし
今はむかし陽成院おりゐさせ給ひての御所は大宮
よりは北西洞院よりは西油の小路よりは東にてなん
ありける大なる池の有ける釣殿に番の者ねたりけ
浅黄の上下きたる翁のことのほかにものわびしけ
なるかいふやう我はこれむかし住し主なり浦
嶋か子のおとゝなりいにしへより此所に住て千二百
余年になるなり
一 山城国田原
やまとにて生有今はかなるてかへる

一 あきまろあんぐつまへ業平かちかつき世安院悍
寓翁とてし人常京山荘に八景を定めて各ゝ奇
をと絶る
手月磧（テヲツノイシ）
織かれ色のうちにもかゝる影の月
栃谷松（クヌギノマツ）
琴の音にかよふやそのたえまあまたに此山彦の松の風
巖濤水（イハカキミツ）
かうやかや水のなかしのなるところにて世のあるさまを清きたて
北岡峯（キタヲカミ）
人をとや向ふにうかん人は秋は小のそらの山のもみ
流六溪（リウリク）

岩もる水のたえくゞりて穴のむかしおもかげのこれるかな

洗密利（ミツノクホ）

たゞこの洞はいにしへくしらかべのかゝりし人みそめしは非なりと

杭流洞（ヤクラノホラ）

うしろ林の梢ちかく水茎のあとのこりけるはむかしの跡なり

飛鳥淵（アスカノフチ）　一寺晩

此寺はいにしへいつのころにか開きける事ハおぼつかなく祇
さきにしるせるにもやといひつたへてふるさとたえにし和寺
の歌よみとなへたる人にもおほくはあらず菊泉の丈山なと
いへる詩人も彼山荘にまうでゝこゝにかよひしことをおもふと詩を
作りしあらたなおぼつかなきをかすく

一　万丹の集にいふ此寺にてある人神のうちにあるは元の句
のことゝ集めたと次の寺にありしあの句によくあるといふに
松風にし集の末に詠みける句の浦の月のかたにうつりて
さゝれかゝる事は字にたえ事の多くて玉葉集に
志らずてこの此のせらる其のものゝ集にあはしたるに
と哉ら尓

出雲風土記に浮根野磯浦より出しあと志るせり中に
薮頭蒿あり其薮頭蒿は正月元日生え長さ六寸と
いへり和名集に薮蒿とかけて松にはこれ（白蒿あり）万
葉集によむとよめる歌らしき事の薮頭蒿も甘菜蒿なり
おほつかなし松風にし風土記に佐世の木萬葉にいへる古華
記に佐志史乃木といへる和名に鳥草樹とかける
木にて山甲（ゆふさかて）のこのさせほしゝやうれしき佐世の木

とハこれをといひつるにや
同風土記云大神大穴持命御子阿遅須伎高日子
命御髪須八握于生晝夜哭坐之辞不通爾時御祖
命御子乗船而率巡八十嶋宇良加志給鞆
猶不止哭之
此はしをろきさすとてうらかしけは宇良加志
とかけるにてそれをしるしや日本紀に推の字
をうらかしとよめることもあるにとよむるなれハ
きこしや
私れしし風土記に都波と呼ひけのお落たかりて
是ことにあるに九月のかは黄なる葉れぬならる
やうしたらむ枝さしねと常につかはるに見え

同風土記に意宇郡ゝ々々とのわたり八東臣
津見命ところ出雲國のちいさくなりたるにけ
れ給はなこのあまりあるよ縫して作まてあまりの
とりたまへりの日本紀にも使とかさらしとや
なりしにあつしかれハ意宇の名かへる浮ちの衆か
落てこうまなたりきくよそへていふ阿處河舟毛曽
呂ささ余といへる阿舟ふ志つらふ行くとのあれとも
ありハ係にかろくもらへすうや
和名ニ醨 唐韻云醨酒薄也
和名之流 一云毛曽古
室原川源出郡家東南卅五里鳥上山北流所謂斐伊
河上
日本紀に鳥上ゝ山簸之河上といへり

鳥上山ハ神門郡ニあり
意宇郡ニ来待川支麻知社あり
嶋根郡ニ玉緒濱あり　飯梨郡ニ飯梨川あり
大原郡ニ須我小川赤崇社等ハ日吉社世裡陀社
ゐわ神門郡ニ保乃加社あり

かけろふ日記ニ此件見えけれハ山つきころり
この風のひまほしれとしちきうる風ちゐしいはつかて
おほしの日記ニいつるさしの人しなとしらふいりて
まらうとしても世の中さいろきんといふやとききてたら
かうとおほしき人かまうしれうるそのきさこゆあめ
つちとかうるに思ひのことすいしはらにしてもうく
さるよろふハ身をうまそ家のいはしこはしいんと

いはまつきんにきらいにおもしへやうのさくり
も作るられたる坐川の上のハ古今やや椎
衣さもあかつちそふたいほいてもあるれたしふ
かうなしきさこらるいくいしもありとるかそとあり
一　けしやきの中ふつるままそしれと
源氏ニけしのとし風ニおもれしは護广のすや
○　性うもほやそてあんてもそぬうしは胸のいうれ
○　あとけいう衣車
○　行基菩薩ハ中くち衆の人れうあるまてこれうそ
本とそうれうしいくうれ
なすれたゝかく思ひしるとえうそれなとつうすれ
きちつれやとうれまてらいゆりきよりのゝ花し

○かざかくれつくりたるを風の所くゝまて屏風としたく
風に向ふものにむかふなり
○たやすくしらぬことを志らぬやうにもなたとしらは精
生と同じなり
○酒飲ままて書せてわるるものなりとは延喜式に
書をてわするも出雲山日神社向ふ
此のまへとん信しうて古れ書きて色よふかるへきや
書くらまかれんとしさいくれいことありしれつ何れはきも
書くらしき書かれ　書くらは信に書れそれをふ
書くらの智ある女のは神　書れと人の目にあらくれそれ
ちからへを志らはくとりすかれ以ての書くりしき
た源氏物語いろは書くりしう白くてさえぬと

以りて書れし
都ほかとれ神の名を何や古の名を聞しまと思る
れほとこいろの神々や
志らつまやとみのふてとあらたされし鏡ならね
行あるかたちつられたとふすてこのむ
以二そちのへなをたれ
かくてつらりかなり如れをに人いらの名のうけまるをれ
書くうしてそれを本八日まて書いのひろさのたなう
あちかやうしことあれとありしと
毎ろちされたるとは神代のならしをかことそると
のちうちらしむすや八月つけさらの日高つかるれ
ひとつしの次えうられてまつへ何くほうしいと

かしこまりさふらふ

これくほくしハ蝶の夢をそゝれなく夢の川
しかとしときこゆれハ六つて谷のおほせうすく
志ふかゝりける身の程をくらひはふとふかゝり
とりてこそねんと云
志ゐるゐる銅鉄もてことゝゞ登るひの銭の錦
いちく鉄よりも都まてふたすり
わか志らりのそれあそてむらしいおうきひけらん
しるそかうりとたへけん ときりのきまてゝあのと
まつりきたまくもちしくする身とらふかまくしかくは
あらはんとさくあふそ蝉のこゑいはしけるなり
みなすくと柞はつかるくしかしこゆとやすかそ名残なり

事にわりしるさゝ君とさくハくちゝてわきまゐ
とおしらや何さまもの笠年と千年すをにいう
光ませてうるゝ身に梅人とおもいわうもくらま
うしいやいらあさせうとをうれさまわりたちてあかり
きんれといはうしはかえられき
志はまつくかえくるとなり
十五日なといれりさ丈乃はりしきこのとのことおなしきを
とくさいくとさけをやゝしくゑいをそへいれらさや
なまらり人夢きうらも
なしいち雛火とかくろさうさちもへとりつり
よろくいはりへしいは
よろかしいて丁のうちとうはろゝよもゆれくとも

奉るべし

ちかきころも世よりしらるる猿すこしむかしのほとり
うつしゐしとぞ云

そのうけつれなどはかとも松をうつしなどもつるなりける
まさにけちてうすかたうらかいとつらす

○此ところは古へしけのほとりなれのむかしちをちかへ
おりつるもいひのしへ風勢のなき明恵修上人の
言葉に

山寺は法師くさくて居よからず心はふくもあれども
くさ好くとはいかにもやとうちなすや

引しいる物をは会坂の関の清みつのながれしめる
名高き相坂山の関のねはゆゑに神にてくらゐつかさる

右二首うちあゐは琴の名をとりしより琴のちまき山にたつ琴は
言のしらべかくいひたりと見え
たしかはせらるしかは色したといひしはくいふて
うたと松のひとところきんなとかうにくあるを
きていろくとほらて思くろんとかたるとあ
たくのいはまにて世をのがれぬ遊仙窟にさらつると
うつ揚つくとうたつへの山の時鶏をうたれ
しの事なり

いはゆる山松陰の筆とて越ゆるしたかき松をしれ松と
更級日記にもいふからなきに風志をしれ松をとて
ころの山をと松をさる門とらへは六帖よ言の御分
とらへる時の涛音より志をしれ松とさすとようて

松ある所をはいつくまでもいはへきにや

狭衣

尋ぬへき志るしの松は誰かいつ松帆山にありやとひせん

をしと思しけるにやあらん

霞関野なとこえて詠しけるにや 云云

うちなかめ給ひしは何の事にかありけん 云云

少納言の年へなれしまゝに尋上りたまひに

あまたつの様なる心のいと様なりける者の大輔なといひしに

めつらしき世の中とひとまりけるに 云云

那須野のつゆをみて成りゆくまゝに詠しけるにや

様らんとの大輔なといひけれとも大輔の大輔

さらにつゆあらぬ様にせんとの心のうちをおもふに

はなその様なる人の何となくあはれなるにや

にしきのうちなる心のうへにてもとめてはいつ

もとの心とこそらくの方とやらにいかなるなるらく

かくてとはいへいとしく思ひかけず松原にかく

ていたれ

何とても不思議なれ也 秋のあはれなる そらの月

さらにをとなき人のなきくれには泣し

いつもの秋のあはれは也みたれ思ふにも人の恋を

みたれ給ふと此身なり万葉集十六にあり

ちるこ所と思はしきかうの事に花の志くして

あへしらひてまつらしきれやしらぬ花のさかり

御えのつきをすき覚て見るる折り

是ぞこの世にあらき嵐へかゝりけるとうけく聴る
車ハらち音ありてのちすみれハいつもさきとつ（ひてみそいへるや）
うへにありけり
延喜式に采女院の式に女振十人とあって
さんへいあかれはろくのみちにありき海にち おほ西岡
日とこのあまくのえやそれらしかなしづきこそかしこる
まつてかきさき志すへけり
為相の大皇　　　　蜻蛉日記
更級日記にあつさ山おほえにて原見郎に有こ
のみやこの色し
こゝろよき京よしのやすくまうす恭しくて
沫のまひなりき

おほつといふ津より舟にのりける
和泉なる今もいふ所なり 土佐日記に小津の
とまりをおふて遠くいく松原めもはるばるなり
ゆけとなほゆきやられぬハ妹かうむをつの浦なる きしの松原
此小津の名を大津にむかへて其ある名今ハなまりて
小津とはいふなりけり
和名集云日根郡呼唹平られる
日本紀ニ三日五月丙子朔癸酉軍至茅渟山城
水門 亦名山水门 茅渟此云智怒 時五瀬命天瘡痛甚乃撫劔而雄
誥之曰慨哉丈大丈 云云
特人因号其處曰雄水門
遊仙窟云行至二三里回頭看數人猶立旧處余

時漸々去遠声沉影滅艣不見

土佐日記にかくいひて漕ゆくまにまに海のほとりにと
まる人も遠くなりぬ船の人も見えすなりぬ岸にもいふ
ことあるへし船にも思ふことあれとかひなし大和
物語にこ漕ゆくいかなる人かと見えて車ハ舟の行
かくれ見えいくたひ舟にのりたる人も車ともろともにかくれ
ことくことにはしおりて漕行けハ遠くなるにしたかひて
いとちいさくなり行まて見おこせけれハいと哀なる事
土佐日記にいはれたる趣に似たりしも意ありて辞きれ〻一文
字ともしられぬおもしろさ見えハ十文字に端〻極妙と
以白ハ文集に軽衫細馬春年少十字街頭一字行
せし句の詞を思ひかけけるにや物せし日記に

今こそもまたとゝまちあるゆくのえの松もらはさらふ家の
へ行り

菅丹集に

こゑんこそ年ハへぬる浪なほ行の末ハまたえいくよかへらん

貫之の舟とまりしてよめる歌

同日記に人ところのさかひにあけぬれハ舟を引つゝのほれ
もとらへり
けあけぬるいまは明ぬるまて船をとめて舟を引
のほるかり

貫之家集に

藤の花咲ぬるとをみて都にかへりあかぬるへつるか
花よりもくちるを見る庭し

同日記に赤穂寺といへる古体の壱演の寺ありけるらくれ

しるかり　三代實録第十三に委しく見えたり
樵夫ふる門とふ海きのしまなけれはとて
奥山にふる門いふ海きの氷りや思ひの杼てやとあり
是も樵夫の粉河まてよみし歌あれは見れ
ともかく古今と引かけ見るへきにや
見えぬなれは
花よそ起れと思ひいろいろ山吹とくち海くし思ひ給
てる御事に侍るとかへり
花よそ急のとらへるかきに是まりたん見なれと給せ
母のなき事し
昔のものかたりは物かたれ土佐紀まうけりくとあり
いふかり下ハ大和高市郡に菊瀬あるにかれ渡

まを称開きけつる此詞もし土佐かけるにはい
ましこ見ゆるに
此意とも見給へき土左中将の日記なともあるへくかき
とらるへきとにいへる
伊勢物語なとと日記とはいへる別としたるなる
更級日記も在五中将集とてありて今三十六人
家仙の中に業平集とくなるは續きへあり
上にもいへる
あはれやらん見ゆるをもてるとりやうく源しふ風の志さ
かんの河しるへきことなりいかにもしつるいはせなけれと
まろしあるや其ものにても思ふところ百あやしとかへり
思ふしとるまやとい八ましこのへいまことさいろいろ

さは縁ある事なるへし

・まことには法師なり

おもしろしとなり

此句ちかきかたなれと 猶あるはまされるかたなるへきにや

清少納言となり

おほかたぬ志きあるへき人なりと釈ゆへなるとなり

後のちりかやとなり

粉川寺は那賀郡にて紀川のほとりにありと諸名所の

事にかけるは只粉河なりとかゝれたる也

日本のこと三ケ所にあり 清家あるは清水をいふにこ

三こと侍る外に方ある所の清水に縁あるへし

湯のほとりにあれは清水 此外にあれは縁あるへし

こと観音

おほく侍る中にまさるはおはしますかきりは

○むまやの記には清水はさとりにもあらねはこそのちかし

○清水にこもるといふはしつらへて大和の中にありあはれなる人いふ

しこそまさるもつまあるかた引きつゝいかうし[illegible]

おもしろい人も[illegible]いつもいふはさかなる

そおのへとさまかえある大将殿はたゝましまろとあつ

まりてさいそきてものはまうりのたてたる事

おのこ[illegible]いまそ神へしてあらむ人のこのこ[illegible]

これうちあいさみてたいまはさかくるあ[illegible]の

いて一まちけうよ世まよさて寺さめくも[illegible]わり文

いちいさきのゆゑといそつらしこ御前とさうら[illegible]

出させたまへりたまへ出させたまふにいとあはれ
やまとのまきうつしけるに松原のまへにてまうしけれ
こまかに清少納言かゝりしとみえしよしをいはれたる事と
けはひよきはなきを此しきしの書きをくれたる
清少納言こそけうありしらぬかしこきかほして侍りし
○うちもへなる御とくに此しかへしは色やをかしくいつはり
そうり
栄花物語に世の中さわかしきことを書たるは疲なり
○御かたはのかくとりあつめてけむあはれなるつきてなし
またとのかたちをみしとはみえもなかりけり
かはらはけしからぬ
御心ちなやましくほとこつきなきとはかなくて
さるへきことんかれてはみそめたまへし人
わかきもとはかゝりしに女房ときはかくれみえもなかと
たかうひさしうつけたり
右の条は宮さいの常にも書つけたるかことくたまはし
うちとりかたらひてあはれなるひてきゝしを
あはれなるへき自にも御まへにかいまく大将殿に御かへりあはれ
おほしまし御かうしもされたるこそいかにもかなしき
たてまつりけり
月日とゝもにちゝかにはせんとまいまつりけれは
今まてのよしいかなるゝの御ためとありまいてさらに
○きこえさせつ
枕冊子かくれこの中納言の二流をいはせたまふと

むつかしけれともたちにはいさゝかしるしありて二のあなとハよ
称するにさへいへり
定家拾遺愚草に小くさんといへる頼政卿の[illegible]源氏によそへしや
花をまた打よせつゝ[illegible]やしらぬかはらのまへに
通俊の後拾遺集序に
ことさらに花をおしみ咲ちる花にて[illegible]
よしやとおもひしかは[illegible]
いかにたのしかりけむ[illegible]
花の糸あやなきや
おとなしとおもひて[illegible]
むかしのあはれをしらぬかな
何かは分ちつゝありけれ

さけの三尺といへり
花のさかりは奥の中にさけるかして一尺
二尺といへるいはれはなにはしらむ
そらにしられ[illegible]をかしき
津の国のせんる
須門にも守護の家あるといへるつのくにのは
あしくもて関山もなぬ
あしとハかしこなり
志賀の山のあなとよりさきて常しくしわかるゝき
ふるみやこにあるらくいへる六帖に
わくらはに[illegible]
廿一奇と云萬葉に[illegible]

のしみすふせんとするにても残らしむとかくしてさけ給にや
まうしの文字にてさたまるとされは此しはいかにそよし
かはりに返ありれはすへてふるきにかくへし
綱のおしへ給ふなり

秋谷に苞苴とあるは紀にあり

日本紀にはおほにへとあり今は世俗にいふつと物あり

こんにやくも世俗なり

夢語も世俗なり　挨寂ははいこそなくといへりこ

ゑたにしとりよりいへり

此詞は緒とたえをしまは松風さしおもとこに見ゆるなくむて

あるしてたへり

又鳳上の車おほしなりなりて梅見にてゆかまする

おいしまてはをとこ人と見えすとおもひてもあるといふ

あまりとれはこそなしておもむきたへり

竹取物語にかくや姫おほせける人くよ佛の石

鉢といへること侍たまもちあらかといふ詞おほくは

あるはなあるまきとやかのまきたるなとひて

んしくされ侍りぬよしへりてとく見と詞合せく字

ふおほしくまきかなをもかたちとて侍へとあまへる

つれる一句にまさよしとものよしとてきこゆ

よせしらなりてくとふへり

羅あさものことはなりたもしくらとてしくて

まうけたるさまなきもし

日本紀に羅のまきとあるなとあり

そのいふしくをしいむなつちいのちもらしこのえら
しくしきをなす
さらしくいふく物といむ名
古しよとかりのうたに見えてしかもかしこしあるなれ
歌詞にも此詞あり
さしてへたりたまのいのちつゝかなせさとのかたへつかうませむ
いはむへきをまさしとしかなかるへし
つゆのいのちのとつきなるものといふ物は大将軍なと
いのちかとし
やらしある事ともしてたまへり
屋にいやとも松前地に作るゝかとかくはる
たまへり給はいやしくかくもやしもやとものいふは

いひとは物にもやまとうたとやあふ
やうに行ていとらへり やまと歌あり
くもとをさてあるやうする也
虎伏いまりね あとをいて
つまるは猫の鼠とほえて人間の也ますまとりして
狐のとかしる庭にとりへるもはへもつる所をおもひぬ草なくそ
けてくちをせまつるとかれをとらへり
ねこの猫をもあそひそるうちにて
此歌ともてとるしこの歌のよみよし言すれいとをへり
とをいうてらむいとまし なりしかはへしひなすすや
今の世にそをよめとい
されとかれは竹の林にありしをもきてさするなとぬきこの名も見れ

これハ低きとりよせのところなれハ丸のかこころひ
るるとおもくあれとり　呉国皇アリテ　思ひる時世のよあれ
なり薩埵王子の因縁よりしよあんかくせり
しらきへとしとのまに一まちみさしきてり
たかまへとしへなきハ浮世なりや　おりしかむし
よりやさかすうの畜生しとしきへなかれまへしや
きしお申れおせらハまむろしするとりて
おせくハせなられくまりとうりや源氏よせ給へれ
ものこそおせ源氏かたれまとりて
なれくる人もとおりとりて
なれしとハ源の中将なりとしかれしるしる人
の立え梅のかわ

風れふきつくるゆふ徳つきてとりてり
ある人これのうた集し
のゝめさハ蜀なり
桂花よのしとへてのとかしなのさかきらてり
枝の句のうり菊の先へとりまりなとし
西行法師ハ家集つくりハ西の一町ほとりなるさき
あり
こしきハうきつちまてひちりこのところに来れ
しろはかし給ふなまとしるとしれすり
かしまそれとへり
まとかくなまりてぬかてといへり
古今のつりてとしてといへり

上出雲寺の天井のさし板の年ゝ年にあれはあらはなる
ところに大きなる魚ありといひて
三尺ばかりの魚ありとゆめにみえけれは かけり
こ法つけのをさなくあさましとて
あこやれまのおほえたる事なりしかとて百葉になそ
ひきしらめ給
古い謙かり
歌とよめるいひたるうし詠とさきまかりつきたれ
を世の人凡子ことのよしにもかゝり
こけ新撰拾遺集ちのをさて不落子撰和篇と
引ためしにあり名の山をそれよりしと
風ゝとゝふ凡子の高の山をみてこれは昔見し乳子

のとかれのこそくるまとおもひしに
新後拾遺集に 題しらす よみ人しらす
水やそらそらやみつともみえわかす かよひてすめる秋の夜の月
此歌は古葉集に橘俊綱家にて月の歌よみける
よしみえたり
新勅撰に 大納言師氏
白露と草葉におきて秋の夜を 詠めあかせる 明くれは松も
新古今に
下もえに思ひきえなんけふりたに あとなき雲のはてそかなしき
又 萩かうへに置露のわかれしわかれはすまゝなかれ
右二首は後撰集に
かきくらす思ひ涙にくれ烟のきえなんもとの人ゆゑ

美のまゝに君か御代をつくるとも是そためしなかりけり　とあり

此二首ともよみ人しらすとそ

めくりわかん路は川を志かな月日へてこそよみぬ　村雨

跡は京極殿の御時に弁の技歌に

めくりあひし路の昔のむかし月のいてよしは

月をのむかしの空をしのひて袖の泪かな

此後言二首ともにてよみ給へり

日本後紀に云天長八年二月乙酉囚獄司物部

定額四十人依無名負氏入色人通取他氏

果補四十人之員兼皆令帯兵仗無人分番

不堪充部也とかけるに定額女嬬のこと

此定額ハ何の人のことかみえす

○日本後紀哥　延喜十四年夏四月戊戌朔戊申曲宴

天皇誦古哥曰

以迩之弊能々那何浮流弥知阿良多米波阿良

多麻良武也能那賀浮流弥知

勅尚侍從三位百濟王明信令和之不得成焉

天皇自代和曰

記美己蘇波和主黎多多曽羅米尓記多麻乃多

和也和礼波都祢乃詩羅多麻

十五年夏四月丙寅宴庭酒酣　上乃歌曰

気左乃阿沙気奈呼登以非都留保登々擬須

伊可毛奈可奴加此登能綺久陪久

十六年冬十月癸亥曲宴酒酣皇帝歌曰

己乃己呂乃志具礼乃阿米尓菊乃波奈知利曽
之奴倍岐阿多良蘘乃香乎
大同二年九月乙巳幸神泉苑琴哥闌奏四位以上共
挿菊花于時皇太弟頌歌云
美那比度乃曽能可尓米豆留布智波賀麻岐
美能於保母能多乎利太流祁布
上和之曰
袁理比度能己〻呂能麻丹真布智浪賀麻宇
倍伊呂布賀久尓保比多理以利
大同三年九月戊戌幸神泉苑有勅令從五位下本郡
朝臣賀是麻呂作和歌曰
伊賀尓布久賀是尓阿礼波可於保志万乃乎
波奈能須惠乎布岐乎須悪大留
皇帝歎悦而授從五位上
延暦二十二年三月庚寅遣唐大使葛野麻呂
副使石川道益賜餞宴設之事一依漢法
酒酣　上喚葛野麻呂於御床下賜酒
天皇歌曰
許能佐氣波於保迩波安良須多比良可尓何
倍理伎末勢止伊波婆比多流佐氣
葛野麿涕涙如雨侍宴群臣無不流涕
弘仁四年夏四月癸未朔甲辰幸皇太弟南池命
文人賦詩右大臣藤原朝臣園人上哥曰
初布乃比乃伊久能保止理尓保止度伎須多比

良波知与止耶久波企々都夜
保止度伎須耶久已惠企久波宇多收志度々
毛企子世尓度和礼毋企々多理
天皇和曰
大臣舞踏
右九首の中に脱減して見かしこき坊まかしくなる
河の沙云れ上の句のことわ葉の古風よりいはと
たゞかうよみ出むるをかいましく古風かる貴之の
新撰和哥集序にも延喜よりまさて
のうたとるぬなれ斗たをなほ古體すらるゝこと
あらぬをあらかほうつゝし
続日本後紀第十九に嘉祥二年三月に興福寺
の危険このとれ以十歳よこえ給ふかと疑しむる
ものなり哥を載 乎かて いとゝ史和哥の體比興爲先
式(式ロ感カ)動人情最在茲矣季世陵遲斯道已墜
今至僧中頗存古語可謂礼失則求之野故
採而載之此時哥の道おとろへたるを悲まさ
るのみへし

元禄十二卯年五月仲旬

契沖述作

泊洎舎蔵